仕事と教育

— アンジア・イジアースカ*Bread Givers* —

A Working Woman and Education

加藤万毟子
KATO Makiko

イジアースカと作品

アンジア・イジアースカは1920年から50年代にかけて作品を発表したが、彼女はニューヨークのロウアーイーストサイドでの暮らしを中心に描いている。

19世紀末によりよい暮らしを求めてロシアから大挙してアメリカへ渡ったユダヤ人の多くは、ロウアーイーストサイドに定住した。アメリカの他の地方へ移動するだけの経済的余裕のなかった彼らは、ここで低賃金の工場労働者として働き、アメリカの高度成長を支えていく。イジアースカ一家も例外ではなかった。

イジアースカは、幾多の困難を乗り越え、ハリウッドでも認められるようになる。しかし、裕福な女性たちが微笑を振りまくパーティで、「いけない、こんな人たちのために自分を裸にしてしまうようでは」(浜野　121)と、ニューヨークへ舞い戻り、その後初めて書いたのが*Bread Givers*である。

キャロル・ショーンは、この作品について、もう「うんざりしているテーマ」(74)のくり返しであるというサミュエル・レイフィルソンの批評を紹介している。一方、メアリー・ディアボーンは、熱狂的読者を得たのは、女性たちがこの作品のなかに「女性の自主性と独立」(176)について、説得力のある語り口を読み取ったからであると述べている。発表から半世紀以上経過してもなお多くの女性読者がこの作品に引きつけられるのは、時代と民族を超えて女性が共感できる女性の教育・自立・仕事・結婚というテーマが描かれているからに違いない。

原作のタイトル、『パンを与える者』はイディッシュ語の「パンを与える者」(broit gibbers)(Schoen 75)、英語では「賃金労働者」(wager earner)である。生活の糧をもたらす者の意であるが、ショーンは「賃金労働者」よりも「パンを与える者」のほうがパンにかぶりつくというイメージが強いと言う(75)。これはロウアーイーストサイドで暮らす主人公、セアラ・スモリンスキー一家にふさわしい表現であろう。

ロウアーイーストサイドのヘスターストリートでのセアラ一家の暮らしは惨めである。一片のパンがあれば即座にかぶりつきたいような暮らしである。「タルムード学者」である父は、生活力はないが一家を支配している。母は不平を言いつつ父に従っている。三人の姉たちは、父の横暴さと極貧に耐え切れず、ここからの脱出の手段として、愛のない結婚を選ぶ。一方、愛のない結婚は避けたいセアラは、家を飛び出し、働きながら教育を受け、収入を得る道を選ぶ。教師の資格を得た彼女は、ヘスターストリートへ戻り、教師として働き、理想の結婚相手にめぐりあうのである。

本稿では、「愛し愛されたい」そして「子供も育てたい」というセアラの結婚観をふまえて、彼女が仕事を得て自立する軌跡を考察する。次の順に論じていく。父の家を飛び出すが、再びヘスターストリートへ戻って働き、この地で結婚相手を選ぶセアラの仕事と教育の価値観を理解するには、旧世界を知る必要があろう。盲目的に父の家を離れ、不幸な結婚に至る姉たちの暮らしをみつめるセアラの視線を追うことによって、女性と経済的自立の問題がみえてくるにちがいない。苦学するセアラの姿からは、移民の若い女性が一人でアメリカ社会で生計を立て、自立のための資格を得る困難が、大学生活からは、自立のための教育の重要性とセアラの将来の仕事上の指針が現れてくる。そして、ヘスターストリートへのセアラの帰還からは、働く女性が直面する問題の一端を捕らえることができるであろう。

自立の決意の背景

人の暮らしは、精神活動が理想の世界と物理的現実世界の両方に向けられてこそバランスがとれた生活になるのであろう。理想の世界のみをみつめている者と、物質的世界をみつめている者がともに暮らすことは困難であろう。とくに力関係において片方が絶対的に強ければ、他方にとってともに暮らすことは苦難の道をたどることである。これがヘスターストリートで暮らすセアラの父と、力関係では弱者の娘たちとの関係である。

ヨーロッパで暮らすことができなくなり、アメリカへ渡ってきたセアラ一家だが、新世界においてもなおヨーロッパのユダヤ社会の生活を引きずり、ヘスーストリートに旧世界を構築しようとする父である。

この父の姿勢はやむをえないことなのである。父は多

くの婿候補のなかから選ばれたのだが、婿としての条件は、ユダヤ教の礼拝堂であるシナゴーグで祈り、ユダヤ教の研究に励むことであった。敬けんなタルムード学者は尊敬されていたのである。

一家の主として働かねばならないという認識がないわけではないが、上述の条件で婿として選ばれた彼に商売で利益をあげる才覚があろうはずがない。母が嘆くように、ソロモンは財を成してから歌を歌ったが、父は「歌を歌い、それから商売に目を向けた」。そしてすべてをなくした一家はアメリカへ移住したのである。

しかし移住の目的など忘れ、常に天を向いて暮らす父である。ヘスターストリートの狭い共同住宅でも、最上の部屋に研究書とともに陣取っている。博学であっても経済力のない父にかわり、一家のやり繰りは母が一手に引き受け、姉たちは働き、セアラはこじきのように燃料を拾い集めなければならない。そのような一家の苦闘にもかかわらず、父は、ユダヤ人の生活・道徳についての律法の書であるタルムードの教えを実践しようとするのだ。

慈善は父にとって何よりも大切である。慈善のための資金集めは何にも優先するのである。厳寒のニューヨークで、セアラにコートさえ買い与えることができなくても、彼は飢えに苦しむロシアの同胞に手を差しのべるのである。彼が娘たちを金銭的援助をしてくれそうな男性に嫁がせようとするのも、この慈善のための資金調達の一つの手段なのだ。

他者を顧みることは、親から子供たちに伝えられるべき大切な教育の一つである。しかし、物質的価値が精神的価値に優先する新世界で、しかもパン一切れさえ入手困難な日常生活を強いられている娘たちに、慈善をとくことは不可能である。

娘たちはタルムードの教えに基づいた両親の日常生活における関係も、父の一方的横暴さとみなすのである。足をえそに冒され重態の母は心細くなっている。夕方の勤行のためにシナゴーグへ行こうとする父に、母はそばにいてほしいと哀願する。それにもかかわらず、医者でもない彼がそばにいるよりシナゴーグへ行って祈れば、「神様はそれを聞き入れ、お前の病気を治してくださるよ」と、言うのである。物理的生活の苦労を母に押しつけるばかりでなく、病気の母を支ええない父に娘たちは憤慨するのである。

しかしながらこの夫婦は相互に支えあっているのである。母は神に祈る父を生活面で支え、その祈りによって天国に行く希望を抱いているのである。二人の間には「真の対話」(Buber　220)があるのだ。口で語られたか、沈黙のうちに行われたかにかかわりなく、相手に向かいあう我と汝の対話があるのである。ユダヤ教の律法の書であるトーラーを説きながら父が母の肩に触れると、「彼の慈しみ深い一瞥は、彼女の上に輝く太陽のようであった」と主人公の視点から描写されている。

一方、父も母をないがしろにしている意識はないのである。タルムードは女性は男性に劣るとはみなしていない。家庭生活のなかで、女性に高い地位を与えている。「女性の行動領域は男性のそれとは異なるが、共同体の幸福にとっての重要性においてまったく遜色はない」(Cohen　81)と記されているように、父にとって母は大切な存在なのである。息を引き取った妻の体にすがりついて、「ママ、ママ！」と子供のように泣くのである。「妻を失った男は、神殿を失ったようなもの」である。

セアラがこのように支えあっている両親の精神の世界に気づくのは大学で学業を終えた後のことであるが、父の一瞥に輝く母の顔が心の片隅に印象深く残っていたに違いないことを心に留めておきたい。

しかしアメリカの物質文明に追従する姉たちは別である。アメリカの夢を謳歌する人びとがあふれるニューヨークの同じ空の下で、彼女たちには旧世界の理解は不可能である。セオドアー・ドライサーの『アメリカの悲劇』のクライド・グリフィスが、アメリカの繁栄のなかで暮らしながら、神のみを見つめる両親と、自分の貧しい境遇を理解できなかったようにである。神をみつめ、他者の救済のみに目を向ける両親の姿と、実生活の貧しさを受け入れることができないクライドは、家を出て働くが、教育も受けず、特技もない移民の若い女性の選択肢は限られている。労働条件の悪い女工になることさえままならないのである。大勢群がる希望者のなかから、「二人だけ」選ばれるのが実情である。姉たちが父に強いられた結婚という新たな力関係のなかに身をおく一方、セアラは父の家を逃げ出す手段として、自立の道を選ぶのである。

自立できない女の悲哀

既婚女性が自立し、仕事をもつことは、経済的豊かさをもたらすばかりでなく、シャーロット・ギルマンが言

うように外に向かっての自己「表現」(Gilman　157)である。仕事をもつことの後者の意義につては後に述べるが、妻が経済力をもつことは、物質主義者である夫婦間では、妻と夫の関係がほぼ対等になることを意味する。

その上、女性の経済力は、その力の程度によるものの、自由に人生の選択ができることでもある。

父の家を逃げ出したセアラは、一夜の宿を姉たちの家に求めようとする。そこで彼女が目にするのは、パンを与える者であることを盾に、絶対的な力を振りかざす夫たちと、自立しえないために横暴な夫から逃げだせない女の悲哀である。

姉たちの夫は物質的世界しかみえない虚栄心に捕らわれたエゴイストである。夫にとって妻は「家政婦」であり、自己主張の手段なのである。三人の夫たちの論理と妻たちの反応は周縁という特殊な条件によるものの、根柢には時空を超えて人が共有する潜在的要素もあると思われるので、個別に述べておきたい。

夫たちの一人は、収入の大部分を自分自身のためにのみ使い、妻には十分与えない。子供のミルク代にさえ困り、家事労働でかつての美しさを失ってしまった妻を非難するのである。「世間の人はあんなに素敵な男がぼろ布のような女を妻にするなんて、どういうことなんだろうと思うよ」と暴言を吐くのである。

他の夫は、妻を人形のように美しく着飾らせ、友人に自分の裕福さを誇示するのである。しかし妻が衣服に高い代価を払うのは拒否するのだ。

もう一人の夫は、中年をすぎた子もちの再婚者であるにもかかわらず、再婚の相手への条件は、美しい人であり、働き者であり、がみがみ女ではないことである。

こうした夫の妻への権力の行使は、ユダヤ移民というアメリカ社会において周縁に生きる男性の、より弱い存在である女性への力の顕示であろう。彼らは、新世界の物質主義と旧世界の家父長的権力だけを行使しているのだ。

この地獄から抜けだせない女性の側にも、ユダヤ移民がかかえる問題の一端がある。移民の若い女性の教育と選択可能な仕事の範囲である。十分教育を受けることのできない者にとって、工場労働と比較すると収入のよい知的職業への就業は不可能である。選択範囲にあるのは、工場労働者としての安い賃金の仕事である。セアラの姉たちも横暴なパンを与える者から自立しようとすれば、低賃金の肉体労働者になるしか方法がないのである。これは彼女たちが自立に踏み切れない理由の一つである。

セアラは大学卒業後の自らの変化として、冷静に物事を分析し論理的に対処できるようになったことを実感している。しかし十分な教育の機会を与えられなかった姉たちは、夫の操り人形であることに不満を感じながら、自らも人形であることを受けいれている。つまり、美しく着飾っていることを誇るのである。この矛盾した生き方を象徴的に表しているのが葬儀の折の親族の衣服の切り取りである。大学を卒業してヘスターストリートへ戻ったセアラは、この不合理な習慣を拒否するのだが、姉たちは葬儀屋のなすがままに衣服の一部を切り取らせるのである。

姉たちが自立に踏み切れない他の理由として、母性の問題がある。育児は創造的であり、母性の喜びを享受しうる活動である。母性の喜びは、国境も民族も越えて女性が共有できる特権である。しかしながら、女性の人権が保護されなければ、喜びという特権は悲劇となるのである。

夫から家政婦同然の扱いをうけている姉の唯一の喜びは、子どもたちと過ごす時である。腕に抱きあげた赤ん坊と、彼女の足元に寄りそう二人の子どもたちに注ぐ彼女の視線は、「太陽の光」のようである。この瞬間には、彼女は母である喜びに浸っているのだが、妻の座を拒否されているような彼女を拘束しているのは、ふり払いえない母性でもあるのだ。

「愛し、愛され、家庭をきずき、子どもを育てたい」がセアラの結婚観であることはすでに触れた。彼女が考える夫婦は、相互に尊敬しあい、支えあい、共に成長できる関係であろう。この関係のなかでこそ、母性の喜びを享受しうるのである。セアラは、姉たちの結婚生活が彼女が胸に秘めた暮らしと余りにも異なることに驚き、姉たちの夫に憤慨し、彼ら夫婦に怒りをぶつけるのである。夫たちは家庭生活へのセアラの介入に立腹し、自立する「根性」を欠いた姉たちは、家を飛び出し自立の道をまい進しようとするセアラをまぶしそうに見まもるだけである。

姉たちがセアラの勇気に圧倒されるのは当然である。20世紀初期のころの女性労働者の賃金は、一日14時間から15時間の労働が多く、時給は2セントから三セントであった[2]。教育も十分受けていない17歳のセアラが自立を希望すれば、このような労働条件で働く以外に方法はないであろう。

怒り狂って姉の家を出たセアラがふと思い出すのは、古い新聞記事のなかの女性の生涯である。この女性は、低賃金で搾取され、髪に白髪が混じるころまで奴隷のように働き続けていた。ところがある日突然、夜学で学ぶ決心をする。そしてこの女性は、仕事と勉学をくり返し、ついに教師になるのである。セアラはこの女性の生き方に従う決意をするのである。

姉たちの夫に追い出されたことばかりでなく、彼女たちの悲惨な生活との直面は、自立しようとするセアラが遭遇する最初の試練であった。決心がなえ、仕事を得て自立することに失敗すれば、セアラ自身もたどることになるかもしれない人生をかいま見たからである。

自立への道

グレース・リー・ボグスとジェームズ・ボグスは、その著書のなかで仕事の二つの意味について述べている。ドイツ語が*werken*と*arbeiten*を、フランス語が*ouvrer*と*travailler*を区別しているように、仕事には「人間の創造性」を表現する語と「苦痛や骨折り」(Boggs 233)を表現する語があると言う。創造的仕事とは人間の自らの成長に欠かせない仕事であり、三章の冒頭で述べた自己表現しうる仕事でもある。苦痛を伴う骨の折れる仕事とは人間のパーソナリティさえ破壊しかねない仕事である。単にパンを得るために強制された選択の余地のない劣悪な労働条件の奴隷的、屈辱的労働である。

『パンを与える者』に目を転じると、後に述べるセアラの婚約者となるヒューゴ・シーリングやセアラの教師としての仕事は前者である。また、経済的活動ではないが、セアラの父のタルムード学者としての仕事も、人の心を育む点で創造的仕事である。一方、後者はヘスターストリートの多くの若い女性が職を得るために群がった低賃金の工場労働である。当時の工場労働者が悲惨であるのは、労働条件が劣悪であるばかりでなくライン上の作業に創造性と仕事への参加意識を見いだせないからである。賃金を得る労働ではないが、セアラが強いられたこじき同然の燃料拾いも後者である。

人間にとって好ましいのは、仕事が生活の糧となると同時に創造的であることであろう。しかし教育も十分受けていないセアラが賃金を得るには、奴隷的労働以外にないのである。大学進学準備のための夜学へ1週間に5日通うために、毎日10時間クリーニング店のアイロンかけの仕事に携わるのである。

わずかの賃金での暮らしは惨めである。セアラは5ドルの週給を、1.5ドルは家賃に、60セントは交通費に、50セントは母への返済金に、そして2ドル40セントを食費に割り振るのである。

1.5ドルの部屋は、唯一ある窓を開けると上層階の住人のごみが舞い込んでくるような部屋であるが、セアラが苦労して見つけた部屋である。若い女性の一人暮らしが白い目でみられていたため、選択の余地がないのである。

2ドル40セントの食費は、セアラが街のパン屋で一杯のコーヒーと二個のロールパンに支払った金額が10セントであるから、毎食パンとコーヒーのみで済ませたとしてもすぐに消え去る額である。仕事の途中に空腹のために母の作る食事に思いをはせ、アイロンで商品を焦がしてしまうのである。償いとしてこの週は3ドルも週給から引かれてしまう。

アイロンかけの仕事は労働条件の悪いものである。重いアイロンを手に、ひどく暑い作業場で10時間働くのは重労働である。他人の洋服が一枚一枚きれいに仕上がることに意義など感じることは不可能である。労働環境の悪い工場の流れ作業と異ならないであろう。しかしセアラは大学に入学し、教師になるという目的に支えられて過酷な仕事に取り組むのである。

セアラはなぜ大学入学と教師になる目的を貫き通しえたのだろうか。女子の小学校入学は独立戦争ころから始まり、女子生徒の数が増加するにしたがって女性教師採用数も増し、師範学校数も増加した。女性教師と男性教師の割合は女性教師のほうが高くなり続け、1900年には70パーセントになる[3]。このように女性が比較的容易に就きうる知的、創造的職業であった。しかし見のがしてはならないのは、彼女のなかに眠っていた旧世界の精神の目覚めである。

「ヤコブとエサウの物語」はセアラのなかで生きていた。彼女が幼いころ、父がくり返し彼女の耳にたたき込んだ物語である。目先の事にまどわされてはならないというこの物語は、セアラに学び続ける勇気を与えるのである。

苦学と孤独にさいなまれるセアラの心のすき間に入りこみ、巧みに彼女の心を捉えるのが姉の紹介によるマックス・ゴールドスタインである。経済的に恵まれ、学問にも理解を示しているようなマックスの甘美な言葉をセ

アラは受け入れようとする。しかし婚約の一歩手前で、彼は全くの物質主義者であることに気づくのだ。マックスは金銭の力があれば、大学卒業者など自由自在に操りうると豪語するのである。彼にとって大学教育も金銭と交換可能な商品なのだ。

このようなマックスから遠ざかったセアラの判断の正しさの裏づけとなり、大学進学を目指し苦学を続ける彼女のエネルギーとなるのが、彼女の心によみがえった「ヤコブとエサウの物語」なのである。

こうして幾多の困難を乗り越えて入学した大学は、知識の面ではセアラに喜びを与える殿堂である。ところが皮肉なことに、アメリカの教育はセアラを旧世界へ引き戻す切っ掛けとなるのである。

心理学で学ぶ「統覚」（apperception）は、新しい経験を過去の経験の助けによって理解する学問である。過去の経験を分析する機会を得たセアラは、アメリカの教育と旧世界の教育を比較することになる。

セアラは、心理学担当のエドモンに次次と質問を投げかけるのである。しかし教授者としての彼の冷淡さに不信感を抱くセアラである。教室外での彼女の質問を余り歓迎しない様子のエドモンは、報酬の割には多すぎる授業を担当し、時間的余裕がないのである。マックスは大学教育を商品化してみせたが、セアラが学ぶ大学においても、教育が切り売りされているのである。

父の教えとともにセアラの体に染み付いているのは、教育現場での尊敬する者との無言の対話である。つまり知識の切り売りではなく、教授者と教えられる者との心の触れあいである。セアラはヘスターストリートの小学校の教師の温かいまなざしを思い出すのだ。教師と視線が合い、微笑み返されたとき、セアラは「なんとわくわくした」ことか。その日一日中とても幸せな気持ちで勉学に励んだものである。父の一瞥に輝く母の顔を想起させるものである。セアラはヘスターストリートを離れて初めて、母がなぜ父の世界に追従しえたかを理解するのである。

教育の場での心の触れ合いこそ教育の原点と信じるセアラは、アメリカの合理的教育と旧世界の精神性を取り入れた教育を次世代に伝えるため、ヘスターストリートへ帰還するのである。

教育を受けることによってセアラは教師の資格を得、奴隷的労働に拘束されることから解放された。教育は旧世界の精神性をふり返る機会も彼女にもたらしたのである。「闇と不毛」でしかなかったヘスターストリートは、精神的にも物質的にも輝かしい実りある場となるのである。

新しい女の出発

時代の先端をいくマンハッタンの南の片隅で、ユダヤ社会の古い習慣が延延と守られている。これを拒否するセアラを、ヘスターストリートの人びとは、「あの女をみてごらんよ、何とアメリカ化してしまったことか」と、白い目で見るのである。しかしながらセアラはこれまでみてきたように、旧世界の人びとのイメージのなかの精神性を軽視し、労働の報酬と自己主張のためにのみ仕事を続けるドライなアメリカ女性ではない。セアラは、アメリカの合理性を取り入れ、自己主張をしつつ、旧世界の精神性とより良い習慣を守り続けて生きようとする新しい女なのである。彼女の願いは、天上のみを見つめる父の世界と現実世界のみをみがちなアメリカ社会の折衷である。

教師という創造的仕事を通して、セアラがどのように自己表現することができるか、つまり理想の教育をしうるか、そして結婚を否定しないセアラがいかに仕事と家庭生活を両立させうるかは、彼女に課せられた課題である。

教師としてのセアラの願いは、理念としては、次世代を担うヘスターストリートの子どもたちが、新世界の権力とユダヤ人としての主張の間で折り合いをつけて生きていける方向へ導くことである。技術的には、子どもたちのなかに学び続ける意志を育みうるように、彼らの心を捉えることである。

セアラがいかに高い理想を掲げても、一人では教育効果は上がらない。教育理念を共有する実行力のある協力者が必要である。彼女が大学卒業後教師として勤務する小学校の校長、ヒューゴ・シーリングがその人である。

東欧からのユダヤ移民であり、クリスチャンであるヒューゴの生き方は、セアラの理念を物語るものである。彼がクリスチャンであることはアメリカ社会への同化であり、英語を教えていることはアメリカ文化を受け入れていることである。

セアラはやがてヒューゴと婚約するが、彼はセアラの父にヘブライ語の教授を願いでるのである。ヘスターストリートの住民は「権力のヒエラルキー」（Aschcroft

7）の頂点を象徴する英語を拒否して暮らすことは不可能であるが、ヘブライ語を守ることは、ユダヤのアイデンティティの主張であり、タルムード学者の父への敬意の印である。

現場の教師としてのヒューゴには、セアラが求めたが大学の教員からは得られなかった教育者としての「情熱といきいきした指導力」があり、上に立つ者の「よそよそしさ」がないのである。

セアラは職場では良き先輩であり協力者となるヒューゴにめぐりあったが、彼らの関係が先輩と後輩から、夫と妻へ移行したときの関係は未知である。社会に向かって自己表現するセアラは「不可視の存在」（Humm 70）ではないし、ヒューゴも彼女を存在感のある一人の女性としてみなすであろう。

問題はヒューゴが理想主義的であり、楽観的であることだ。セアラは彼との会話から、理想主義的傾向を察知するのである。ヒューゴは父にヘブライ語の教えを請うばかりでなく、父との同居まで提案するのである。セアラは旧世界で形成された鋳型にはまったような頑固な父との三人暮らしは、家庭崩壊の原因となると思うのだが、ヒューゴは二人の家庭はより豊かになると確信しているのだ。セアラはヒューゴの「楽天的情熱を笑う」のである。当時もなお「法律の大部分が男性によって定められている」アメリカである。現実認識がセアラとは少しずれているヒューゴとの生活で、仕事をする女性として彼女が背負う問題は少なくないであろう。

セアラはヒューゴとの結婚でユダヤ人女性としての拘束は解かれるが、多くの働く女性が抱える問題に直面するのはこれからである。

注

1　引用文の邦訳はすべて拙訳。

2　女性の労働については、ベス・ミルステイン・カバを参照。

3　女性教師については、大柴衛を参照。

引用文献

Ashcroft, Bill. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-Colonial Literature.* New York: Routledge, 1989.

Boggs, Grace Lee and Boggs James. *Revolution and Evolution in the Twentieth Century.* New York: Monthly Review Press, 1974.

Buber, Martin. *Ich und Du.* Leipzig: Insel, 1923.

------. *Zwiesprache.* Berlin: Schocken, 1932.

ブーバー・マーティン『我と汝　対話』田口義弘訳　みすず書房　1978年

Dearborn, Mary V. *Love in the Promised Land: The Story of Anzia Yezierska and John Dewey.* New York: Free Press, 1988.

Gilman, Charlotte Parkins. *Women and Economics.* 1898. New York: Prometheus Books, 1994.

浜野成生『ユダヤ系アメリカ文学の出発』研究社出版　1984年

Humm, Maggie. *The Dictionary of Feminism Theory.* 1989. Edinburgh: Edinburgh UP, 2003.

Kava, Beth Millstein and Bodin Jeanne. *We, the American Women　A Documentary History.* Chicago: Science Research Associates. Inc., 1977.

コーエン、アブラハム『タルムード入門　二』市川裕　藤井悦子訳　教文館　1997年

大柴衛『アメリカの女子教育実力派のバックグランド』有斐閣　1982年

Schoen, Carol B. *Anzia Yezierska.* Boston: Twayne, 1982.

Yezierska, Anzia. *Bread Givers.* 1925. New York: Persea, 2003.